

弥生の高地性集落に「弥生の戦さ」・日本人のルーツを探して

yayoi_jpn00.htm 2006.10.5. by Mutsu Nakanishi

神戸市西端の丘陵地 明石川流域の玉津・伊川谷・櫛谷

弥生初期から多くの集落があり、平野を見下ろす丘陵の上には高地性集落ここでも「弥生の戦さ」があった



石鏃が17ヶ所も刺さった人骨
弥生中期/玉津新方遺跡



青銅製武器の刺さった人骨
弥生中期/玉津田中遺跡



神戸市西端の丘陵地 明石川流域の
玉津・伊川谷・櫛谷の弥生遺跡分布



表山遺跡

頭高山遺跡



神戸 伊川谷 弥生の高地性集落

本年7月 阪神間の弥生の高地性集落「会下山遺跡」を教えてもらって 周辺の弥生の高地性集落に興味をもって調べている。

高地性弥生の高地性集落の本当の姿はいまだに良く判っていない部分が多いが、「戦の備え」。

弥生の中期 北部九州から瀬戸内沿岸の高台や瀬戸内海の島に出現し、その後規模を拡大して 日本各地に伝播し、大和の勢力が強くなると共に消えてゆく。

山の高台の生業を営むには不向きな場所にあり、礫や石鏃などの武器やのろし台などが出土することから、平地の集落と連携して戦さに備えた集落と考えられている。 ちょうどこの弥生中期は、弥生の人口が急速に増え、水田耕作が安定してその生産性を高めてゆく時代であり、朝鮮半島からもたらされる鉄器もその実用性を増してくる時代である。

「戦さを知らぬ縄文の時代」から 大陸・朝鮮半島からやってきた渡来人が「水田耕作の農耕文化」と「鉄」をもたらし、「弥生の戦さの時代をもたらした」と良く言われる。

弥生の戦さといっても 自分たちの周辺にはなく、どこか 遠いところで起こったものと思い込んでいましたが、私の住む神戸須磨周辺 直ぐ西の明石平野を取り囲む丘陵地でも 高地性集落が谷筋の平地を見下ろす丘陵地の上に作られ、平地の集落では石鏃の刺さった人骨が出土する。

阪神間や大阪湾周辺のあちこちの弥生遺跡からは武器の刺さった人骨が数多く出土しています。

本当に身近なところで 「弥生の戦」が起こっている。びっくりです。

「弥生の戦」

誰と誰が戦ったのか・・・???

また その規模は・・・???

弥生人が縄文人と大戦争をやった形跡はない

しかし 弥生人が東進するにつれ 縄文人は消え去った

縄文人は一体どこへ消えたのか・・・???

また われわれ現代人のルーツの弥生人とは・・・

渡来人=弥生人??? などなど

まったく 知らないことばかり

弥生の後期 大量の鉄の武器を持って山陰に現れた巨大高地性集落 妻木晩田遺跡などは 巨大化した地方豪族の国と国の戦いを思わせ、その後の「国と国の戦」の卑弥呼の時代を経て 大和王権の時代へと繋がってゆく。

このような国と国との戦争は古事記や風土記を通じて 何とはなしに理解できるのですが、それ以前に「戦」は始まっており、その「戦」については全く判らない。
そして この戦いを通じて 現代日本人のルーツが固まってきたというのに・・・・。
また、弥生時代の生業である「水田耕作や弥生の戦」に果たした「鉄」の役割も大きいだろう。

「弥生時代という遠い昔 ついつい 直ぐに 卑弥呼・邪馬台国 そして大和へ」 と行ってしまって 知らないことが多い。
そんなことで、「本当に身近なところで 弥生の戦が起こっている」をキーワードに神戸周辺の弥生の高地性集落をせっせと訪ねる一方
「弥生の戦」 「現代人につながる弥生人」について 調べてみました。
弥生時代が最初にはじまる北部九州・壱岐の数多くの遺跡にもツアーで行けたのもラッキーでした
正しいかどうか 判りませんが 私の私見を含め、下記の PDF file にまとめました

弥生の高地性集落に「弥生の戦」・日本人のルーツを探して

1. 日本人誕生と弥生時代の展開
2. 農耕社会の展開と鉄の役割
3. 北部九州の甕棺墓が語る「弥生の人口爆発と戦さ」

縄文人は「弥生人との戦に敗れ、南と北の端に追いやられ 列島から消えていったのではないか??」とぼんやりイメージしていましたが、そうではないらしい。

鉄が弥生の戦をもたらしたが、武器としてではない。 鉄文化がもたらした水田耕作の生産向上・人口爆発が戦・格差を生んだ。
弥生の戦から見てくる日本人のルーツほか 現代社会を見る視点にも通じる事例を感じ取ってもらえれば 幸いです。

参考資料

「日本人はるかな旅 第5集 そして 日本人がうまれた」
神戸市埋蔵文化財センタ特別企画展示「神戸考古学 BEST50」
第35回尼崎市立田能遺跡資料館特別展「弥生の戦い」
兵庫県埋蔵文化財センタ 兵庫県埋蔵文化財情報「ひょうごの遺跡」

大阪湾北岸の阪神・神戸西部に見る弥生の戦の痕跡

神戸市	新方遺跡	弥生前期	17本の石鏃が刺さった人骨など石鏃の刺さった人骨3体 縄文系人骨
豊中市	勝部遺跡	弥生中期	打製石剣の刺さった人骨
神戸市	玉津田中遺跡	弥生中期	青銅武器鋒の刺さった人骨
愛媛小松町	大開遺跡	弥生中期	石鏃製作工房
豊中市	勝部遺跡	弥生中期	
芦屋市	会下山遺跡 高地性集落	弥生中期後半	石弾 石鏃 三翼鏃 鉄・銅鏃
神戸市	玉津田中遺跡	弥生中期	木棺内折れた青銅武器鋒・石鏃 樹皮巻打製石剣
神戸市	表山遺跡 高地性集落	弥生中期末～後期初頭	環濠内から鉄鏃 石弾 石鏃 小形仿製鏡
神戸市	頭高山遺跡 高地性集落	弥生中期	のろし跡 石剣・石鏃など多数の武器

弥生時代後期 山陰の鉄

	刀剣	鏃	工具	農具	伐採	他	小計	不明	総数	備考
福 岡	83	388	500	258	213	61	1503	243	1746	
熊 本	17	377	189	168	45	37	823	1068	1891	
佐 賀	26	47	91	85	69	19	337	28	365	
長 門	3	32	55	13	17	82	203	20	223	
島 根	25	67	224	34	76	88	516	149	934	上寺地270
岡山	13	120	105	18	17	18	291	144	435	うち94点は県北部
兵庫北部	18	50	72	0	7	15	162	7	169	
兵庫南部	11	30	22	0	6	20	89	22	111	
京都北部	49	103	53	1	1	10	217	17	234	
京都南部	1	6	9	3	2	9	30	4	34	
大 阪	3	32	19	3	14	16	87	66	153	

弥生後期の鉄器出土数
 (藤田憲司「見えざる鉄器」『究極』Ⅱ2002年9月を一部改変)



妻木晩田古墳



青谷上寺地遺跡



▲磨製石鏃・漢式三翼鏃・銅鏃

会下山遺跡出土 石弾・鏃



石剣・石鏃など武器

頭高山遺跡出土



青銅製武器の刺さった人骨

弥生時代中期 / 玉津田中遺跡
 ① 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所提供

上半身に石鏃を射込まれた人物

弥生時代中期 / 山賀遺跡
 (財) 大阪府文化財センター提供

11本の石鏃が刺さった人物

弥生時代中期 / 雁屋遺跡
 四條畷市教育委員会提供



弥生時代前期人骨出土状況



人骨3の石鏃出土状況

神戸新方遺跡 石鏃の刺さった人骨

弥生後期の大型集落 鉄製品を多蔵

14. 弥生の高地性集落に「弥生の戦さ」・日本人のルーツを探して

1. 日本人の誕生と弥生時代の展開

「日本人はるかな旅⑤ そして日本人が生まれた」等より 整理

ある弥生のシンポジウムで「 暴論ではあるが、『 弥生の集落の発掘調査で 渡来人つまり 半島の人々の骨ばかり発掘してどうする』 われわれが知りたいのは 今のわれわれの先祖だ」との発言があり、びっくりはしましたが、うなっていました。一般には「自分たちと渡来人とは別の存在だ」との空気が強い。

「海を渡ってきた渡来人と在来の縄文人とが融合して現代人につながる日本人が誕生した」ことは判っているつもりなのですが、渡来してきた弥生人はいったい異邦人と思ってしまう。

弥生人のルーツは紀元前7,8世紀から4,5世紀にかけて 戦乱の大陸から、北部九州を中心に水田稲作の技術と金属器・鉄の技術を持って海を渡ってきた渡来人であると考えられている。もし、弥生人が海を渡った人達が主とすれば、それこそ すごい数の人達が、この頃 一気に海を渡ってこなければならぬ。

また、現代の日本人の資質は個人差はあるにしろ、ほぼ 縄文人3 弥生人7の資質をそれぞれの内に持っているといわれる。

「在来の縄文人はどこへ行ったのか ????.」

弥生時代 戦の痕跡はあるにしろ はっきりとした縄文と弥生人の大きな戦いの痕跡は見られない。

今まで、この疑問にほとんど明快な回答が示されなかったため、常に上記の誤解がある。

答えは すごい数の弥生人が大挙して 日本にやってきたわけでもなく

縄文人と弥生人が2つに別れて大戦争をやったわけでもないらしい。

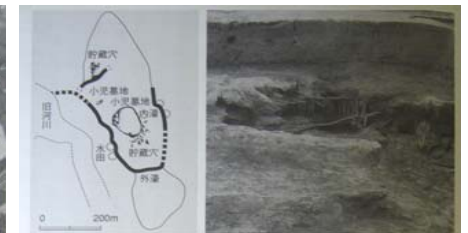
渡来した弥生人が持ってきた水田稲作と鉄の技術が安定した定住生活を促し、
長寿命化・出生率の増加を生み、定住生活を始めた渡来系弥生人の村を中心に
人口爆発が起きたと考えるとこの疑問に答えられるという。
近年の発掘調査の結果もそんな証拠を提供するという。

当初 北部九州では この人口爆発により、一定の地域でほとんどが弥生人になった時期もあるといい、水田耕作で定住した渡来人の集落では増加人口を養うため、さらに新しい耕地を求めて東進をはじめる。

一方 縄文人もこの弥生人の定住・水田稲作を学び、今までの狩猟採集の移動生活をやめ、次第に渡来系弥生人と融合しながら 縄文系の弥生人の集落も誕生する。

縄文人と弥生人が共同で作った集落も現れてくる。

そして、これらの集落が融合しつつ、2世 3世と代を重ねて 弥生の時代が成熟してゆく。



初期渡来系弥生人の集落 板付遺跡と渡来人が持ってきた土器 遠賀川式土器が在来の土器と融合しながら 東進する。 弥生の尺度である

日本で最初に古い水田耕作の跡が見つかったのは、九州北部 福岡の板付遺跡。この人たちの使っていた土器 遠賀川式土器の広がりを追うことで、渡来系弥生人の集落の東進の様子が見えるという。

一方 西日本では縄文系の集落が渡来系弥生人の集落と同時に存在することが出土する土器や人骨の調査から次第にわかってきた。戦争などで一気に弥生の村に置き換わったのではないことが、わかってきたのである。

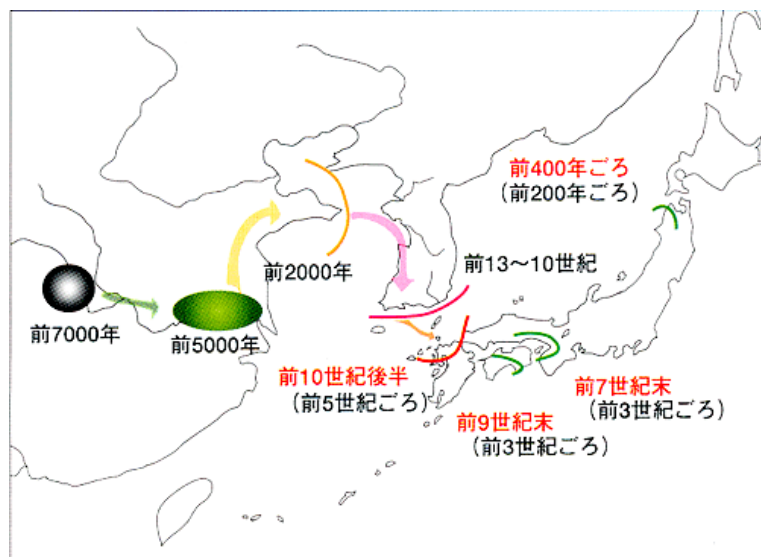


図1：稲作拡散図（括弧内は従来の年代観）

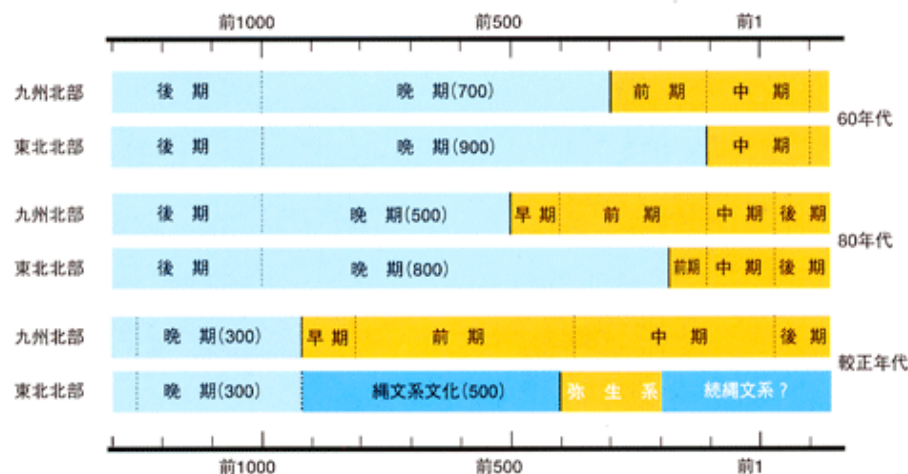


図2：縄文時代と弥生時代の変遷

年代が上がると同時に、拡散する時間が長くなっていることが見てとれる。

西暦	中国	韓国	九州北部	瀬戸内東部	西暦	近畿	南関東	東北北部	西暦
2500	龍山	後期	縄文時代	縄文時代	2500	中	加賀利E4 *弥生寺1 *弥生寺2 *堀之内1	*大木10a *沖野式	2500
2000	夏	後期	縄文時代	縄文時代	2000	後	*堀之内2 *加賀利B1 *加賀利B2 *加賀利B3	*宮戸1b *十腰内1 *十腰内2	2000
1500	商	前期	縄文時代	縄文時代	1500	中	*温賀里I *温賀里II *温賀里III	*十腰内3 *十腰内4 *十腰内5 *十腰内6	1500
1000	西周 770	前期	縄文時代	縄文時代	1000	前	*安行I *安行IIa *安行IIb *安行IIc *安行III	*大羽1 *大羽2 *大羽3C *大羽C1 *大羽C2	1000
500	春秋 403/453	後期	縄文時代	縄文時代	500	前	*口酒井 *荒海	*大羽A1 *大羽A2 *大羽A'	500
250	戦国 221	後期	縄文時代	縄文時代	250	中	*中里	*大羽A *大羽B *大羽C *大羽D	250
BC	前漢 206	後期	縄文時代	縄文時代	BC	後			BC
AD	後漢 25	前期	縄文時代	縄文時代	AD	後			AD

表1：炭素14年代の校正年代にもとづく縄文～弥生時代の実年代
（*は年代を測定した土器型式）
www.rekihaku.ac.jp/.../hokoku05/b/b.html
時代区分と弥生文化の範囲 藤尾慎一郎より



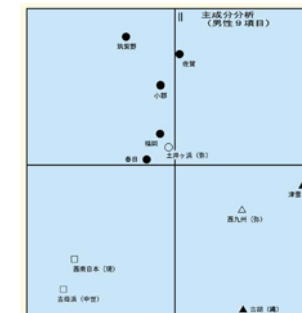
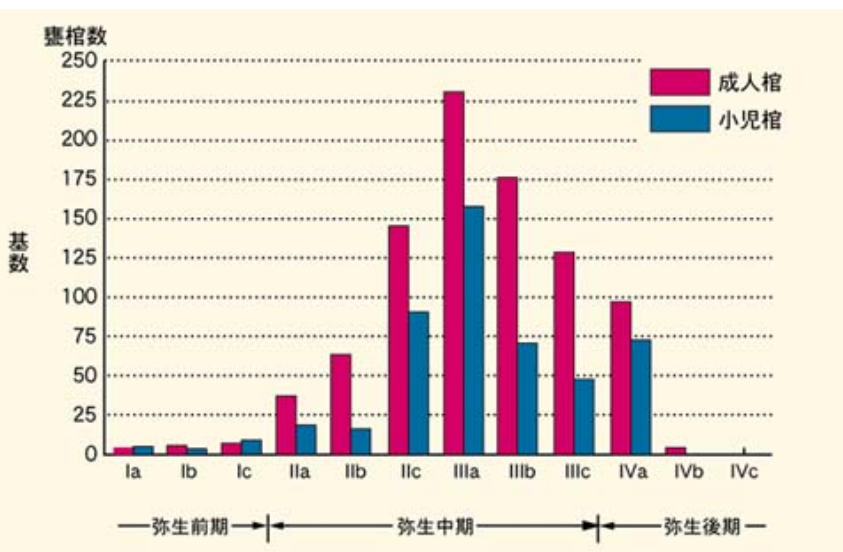
東日本の縄文土器の西方への展開
紀元前3～4世紀

東の縄文人が西日本の農耕集落に入ってきている



西小田渡来系弥生人 縄文人

北部九州の渡来系弥生人



紫野市から小郡市にかけての地域には、集落や墳墓など、弥生時代の遺跡が密集して分布している。

筑紫野市南端部、小郡津古丘陵につながる隈・西小田地区には、弥生時代の大規模な墳墓群が見つかっている。

隈・西小田地区遺跡群は、弥生時代から古墳時代にかけて

の遺跡群で、各調査地点で弥生時代の甕棺と呼ばれる大型の土器に、遺体を納めて埋葬した墳墓群が出土。

数百基を数える甕棺の多くからは、何も出土しないか、人骨が出土するにとどまりますが、その中のほんのわずかな甕棺からは、中国前漢代の青銅鏡や青銅武器、玉類、ゴホウラ等の貝輪などのような、当時非常に貴重であった副葬品が出土している。

(筑紫野市歴史博物館『ちくしの散歩 17 筑紫野のクニグニ』より)

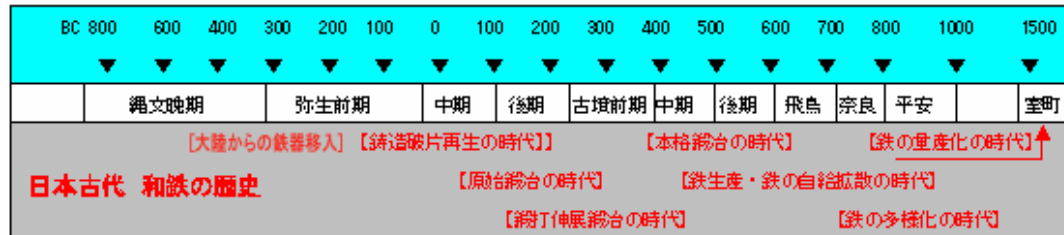
14. 弥生の高地性集落に「弥生の戦さ」・日本人のルーツを探して

2. 弥生時代 農耕社会の展開 と 鉄の役割

インターネット 検索を中心に資料をぬきだしました

「水田稲作」と「鉄」 大陸からの新しい技術・物資・人の流入

－ 日本古代 和 鉄 の 歴 史 －



日本で最古の鉄器は福岡県曲がり田遺跡で出土した板状鉄器と熊本県斉藤山遺跡から出土した鉄斧で紀元前五世紀頃のもので、ちょうど弥生時代の始まり 日本で水田稲作が見つかる時期とほぼ同じ時代である。

いいかえれば、稲作の展開には鉄が不可欠であり、鉄と稲作の技術を持った人々が大陸から日本列島にわたり、鉄器文化・農耕文化の幕が開いたと考えられる。

弥生時代は農耕社会。各地の遺跡から様々な農具が出土しており、水田の跡も佐賀県唐津市菜畑遺跡、福岡県福岡市板付遺跡、静岡県静岡市登呂遺跡などで発見されている。また、農具は「土を耕す道具（鋤・鍬等）」、「収穫する道具（石包丁・鎌等）」、「脱穀する道具（臼・竝杵等）」に大きく分けられ、既に現在にまでつながる基本的な農具がほぼ全て揃っていた。

そして、弥生時代の前期には鋤や鍬も刃先まで木製であったが、中期以降、先端に鉄の刃先を装着するものが出現。収穫具も中期後半から後期になると石包丁など穂先を摘み取って収穫するものから、根元を刈る鎌に変化していった。



鉄製農具

(鋤先および鍬先・佐賀県吉野ヶ里遺跡出土)



収穫する道具

(石包丁・佐賀県吉野ヶ里遺跡出土)



鋤柄

鍬先

鋤・鍬の刃先

田下駄 表

裏

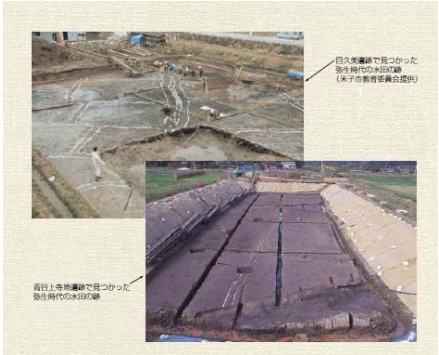


石包丁の使用例

鉄鎌

このような農具の変化が農耕の更なる生産性の向上をもたらし、人口を爆発させ、小さな集落集団の社会から地域社会そして国へと社会を大きく発展させていった。そして、この過程で「戦さ」が起こり、その備えとして、集落は環濠をめぐらした大型集落・周囲を見渡し異変を監視する高地性集落を生む。

また、弥生時代は日本の国づくりの黎明期 大きな変革の時代であり、鉄器の幕開けの時代であると共に、中国・朝鮮との交流を通じて、東アジアの社会に登場する時代でもある。



■ 弥生時代 各地の鉄器と鍛冶加工
弥生時代後期の鉄器出土数

	刀剣	鏃	工具	農具	伐採	他	小計	不明	総数	備考
福岡	83	388	500	258	213	61	1503	243	1746	
熊本	17	377	189	158	45	37	823	1068	1891	
佐賀	26	47	91	85	69	19	337	28	365	
島根	3	32	56	13	17	82	203	20	223	
鳥取	26	67	224	34	76	88	515	149	934	上寺地270
岡山	13	120	105	18	17	18	291	144	435	うち94点は県北部
兵庫北部	18	50	72	0	7	15	162	7	169	
兵庫南部	11	30	22	0	6	20	89	22	111	
京都北部	49	103	53	1	1	10	217	17	234	
京都南部	1	6	9	3	2	9	30	4	34	
大阪	3	32	19	3	14	16	87	66	153	

弥生後期の鉄器出土数
(藤田憲司「見えざる鉄器」『究班』Ⅱ 2002年9月を一部改変)



妻木晩田遺跡出土の鉄器群



青谷上寺地遺跡出土鉄器群

日本の鉄加工は九州の玄海灘沿岸で始まり、ここを中心に発展していく。九州のほかの地域は、弥生時代後期になると、玄界灘沿岸部とほとんど同じ完成された状態になる。その吸収で熊本県の鉄器の出土が非常に多く注目される。熊本県で鉄器工房跡が発掘された西弥護免遺跡は、4重の環濠を持つ大環濠集落である。

また、宮崎県延岡市でも、鉄器を加工した遺跡が見つかっている。

瀬戸内海の西部については、東北部九州に準ずる状態であるが、瀬戸内海東部は、生産の技術も密度も九州などに比べるとかなりの差があるということになる。

近畿地方でも、多くはないが、鉄器は出土する。しかし、大和朝廷発祥の地といわれる奈良県の鉄器出土は、かなり少ない。

山陰地方は、九州に匹敵するくらい鉄器の普及は、進んでいたものと思われる。

弥生時代後期の平田遺跡(島根県木次町平田)などの鉄器工房跡が発掘されている。

九州や山口では、高温溶解が出来る高性能な炉も出現し、鍛錬だけでなく、製錬まで行われていた可能性がある。

一方 弥生時代 日本での製鉄はまだ行われておらず、鉄の素材はほとんどすべて輸入品と考えられ、玄関口である玄界灘沿岸から離れた熊本県や山陰地方での鉄器の出土が多いというのは、独自に鉄を調達する経路を持っていたと考えられ、注目に値する。

《原の辻遺跡 鉄器・青銅器 農具》弥生時代中期後半（紀元前1世紀～紀元前後）



上段左…鉄鎌 右…鍬先
中段左…鉄鎌 右…刀子
下段左2本…鉄斧 右2本…鍬先

（紀元前1世紀～紀元前後）



青銅製鋤先
弥生時代後期～古墳時代前期



鹿角製柄付刀子
弥生時代中期後半

『魏志倭人伝』に記載のある「一支国」の中心集落跡として知られる。多重環濠で囲まれた範囲は24haに達し、大陸との交渉を裏づける土器、青銅器、鉄器等が多数出土している。これらの出土は、それぞれ北部九州地域と朝鮮半島南岸地域との交流を裏付けるものであり、『魏志倭人伝』で「南北市糶」と表現された両地域との交流の実態を改めて確認することとなりました。

弥生時代 レビュー 大陸からの新しい技術・物資・人の流入による弥生文化の成立

鉄器の導入による大規模水田耕作の展開が社会をかえてゆく時代

- 前4世紀～後3世紀 土器の様式からふつう3期に区分される
（早期 前10世紀頃～前5世紀 縄文晩期後半を遡らせて呼ぶ説もある）
- ・前期…前4世紀～前2世紀 （前4世紀～前2世紀）
 - ・中期…前1世紀～後1世紀 （前1世紀）
 - ・後期…後2世紀～後3世紀 （後1～3世紀）

1. 水稻耕作の拡大

- (a) 水田農耕の開始(紀元前5～4世紀＝縄文時代晩期)
夜臼式土器(縄文晩期の土器)と水田跡の共伴…例:板付遺跡(福岡県)・菜畑遺跡(佐賀県)
- (b) 前4世紀初めには西日本に水稻耕作を基礎とする弥生文化成立
- (c) 急速に西日本から東日本へ拡大(中期(前期末)には東北地方に達する、例:垂柳遺跡(青森県))

2. 金属器の使用…鉄器、青銅器の使用開始(ほぼ同時)

3. 大陸系磨製石器の登場

- (a) 伐採・加工用石斧…太型蛤刃石斧(伐採用)、加工用石斧(扁平片刃石斧(手斧用途)、柱状片刃石斧(鑿用途))・
大型建築物の建築可能となり、高殿、楼閣建築の増加
- (b) 石包丁(石庖丁)…穂首刈り

4. 機織り技術

■ 鉄器がもたらした水田農耕と戦さの始まり 大規模灌漑を伴う水田耕作を可能とし、また 戦闘の武器になったのが、鉄器

日本のルーツ 日本人形成のルーツ探し

鉄器導入による大規模水田耕作の展開は生産量の増大と共に人口増をもたらし、それがさらに灌漑設備の導入・新規耕田の開発をもたらし、集団がますます大きくなる。また、大きな水田の広がりには 灌漑・水利の争いをも生み、川筋を中心とした集団が強力なリーダーの下にまとまってくる。

それが更なる地域間紛争を巻き起こし、国を生み 国と国の争いへと展開してゆく。

弥生時代は「争い」の時代であり、日本各地に国が形成されてゆく時代である。

大規模灌漑を伴う水田耕作を可能とし、また 戦闘の武器になったのが、鉄器である。

大陸・朝鮮半島からの鉄器を持った農耕集団の度重なる大規模な人の渡来が この変化を加速する。

水田稲作が日本に伝わったのは紀元前4,5世紀頃 鉄も早くに伝来したが、日本での製鉄・鉄製造は5,6世紀であり、鉄器の供給はそれまで朝鮮半島からの移入・供給に頼らざるを得なかった。当初 鉄は貴重品であり、水田耕作も木製や石の農具に頼らねばならなかったが、弥生の中期以降 朝鮮半島との交流が盛んになり、鉄製品が実用品として使われると共に水田農耕の生産性が向上。農耕集落・農耕社会での人口が爆発的に増加し、社会が変化してゆく。

そして、逆に鉄供給・支配が集団の力関係を大きく変え、大規模な国間の戦闘の時代に入ってゆく。

そんな中で 弥生後期には日本各地に数十の国が起こり、倭の大乱を経て 卑弥呼の時代へと入ってゆく。

「稲作」と「鉄」が日本に「戦さ」を持ち込んだといわれるゆえんである。

このように 時代を変えていった「稲作」と「鉄」そして それを持って日本へ渡ってきた渡来集団が日本各地で在来の集団と融合交流しつつ、農耕社会を形成して、弥生の時代が展開していった。

ひとえに「縄文人から 弥生人へ そして農耕社会が人口爆発を生み、そして 延々と大和の現代人が形作られていった」といわれる。
最近の DNA 分析の展開の成果によると現在人の資質解析によると 多少それぞれのばらつきはあるにしろ 現代人は縄文人の資質 30% 残りの弥生人の資質 70%程度を受け継いでいるという。
鉄が弥生の世界にどのように受け継がれ、社会がどのように変化していったかを考えることは 日本のルーツ 日本人形成のルーツ探しでもある。

■ 弥生時代 水田稲作

弥生後期 農具として 鉄器が使われるようになり生産性が大きく変化

1. 農具

- (a) 木製農具…鍬、鋤、えぶり、田下駄(湿田用)、大足(堆肥すき込み)、木臼・竪杵(脱穀用)
- (b) 石製農具…石包丁(穂首刈り) → 鉄鎌(後期)
- (c) 農具製造用の道具 (加工用)磨製石器→鉄製工具(斧・やりがんな・刀子)の使用(後期)

2. 水田 (一般的な流れ、当初から確立した技術が伝播したという説もあり)

- (a) 小区画水田 → より大規模な水田(灌漑・排水設備完備)
- (b) 湿田 → 乾田
湿田…地下水位が高く、常に冠水しており、排水施設が必要
乾田…地下水位が低く、通常は冠水していない、灌漑設備が必要(現在の水田)
冠水していないため、有機物の分解が早く、栄養分が多い

■ 弥生の集落

A. 住居

- (a) 竪穴(式)住居、高床(式)倉庫、平地式建物(いずれも掘立柱)の増加
- (b) 楼閣建築、高殿などの大型建築の出現…クニの支配者の住居、儀式的空間
- (c) 物見やぐら ←戦争の存在

- ・環濠集落の出現 例：吉野ヶ里遺跡(佐賀県)、唐古・鍵遺跡(奈良県)、池上・曽根遺跡(大阪府)、大塚遺跡(神奈川県)、板付遺跡(福岡県)、原の辻遺跡(福岡県玄岐)
- ・高地性集落の出現…例：会下山遺跡(兵庫県)、紫雲出山遺跡(香川県)

■ 主要遺跡

- 1. 菜畑遺跡(佐賀県) 縄文晩期の水田跡検出
- 2. 板付遺跡(福岡県)…前期、縄文晩期の水田跡検出
- 3. 垂柳遺跡(青森県)…中期の水田跡が検出、稲作は中期には青森まで伝播
- 4. 登呂遺跡(静岡県)…後期の代表的遺跡、戦後の考古学は本遺跡からスタート
- 5. 百間川遺跡群(岡山県)…田植えの跡の検出

B. 集落

- (a) 縄文時代よりも大規模化
拠点集落(環濠に囲まれるなどした大規模集落)の出現…クニの中心 通常は 20~30 戸か
- (b) 低地に営まれるようになる ←水稻耕作
- (c) 防御施設を備える集落の出現=戦争の存在

14. 弥生の高地性集落に「弥生の戦さ」・日本人のルーツを探して

3. 北部九州の甕棺墓が語る「渡来系弥生人集落の人口爆発と戦」

甕棺墓は、甕・壺を棺とする墓で弥生時代前期～中期の北部九州で非常に顕著に見られる。

弥生時代前期 大陸から水田稲作と金属器・鉄技術を持ってやってきた渡来人たちが、北部九州に定住し、成人埋葬用に大型の甕棺を製造し始め、甕棺墓が定着。弥生時代中期に甕棺墓は最盛期を迎える。主として前原市付近、福岡市付近、佐賀県神埼郡付近などに分布。西日本各地に広がり、弥生時代末期にはほとんど見られなくなる。

筑紫野市南端から小郡市にかけての津古丘陵につながる隈・西小田地区の甕棺墓群の解析などから弥生時代の中期中葉九州北部の渡来系弥生人の集落で人口爆発が起こり、この地域での急速な縄文人消滅の理由と考えられ、この人口増加は農耕定住生活を営む渡来系弥生人の長寿命化・出生率の増加によるものと推定されている。一方、狩猟・採取の縄文人は寿命・出生率の低さゆえに、その数を急激に減らした。

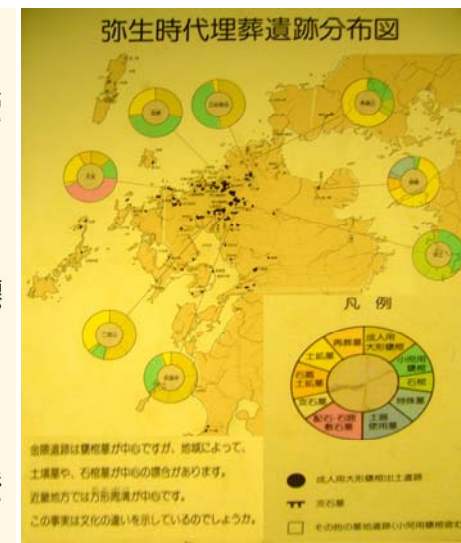
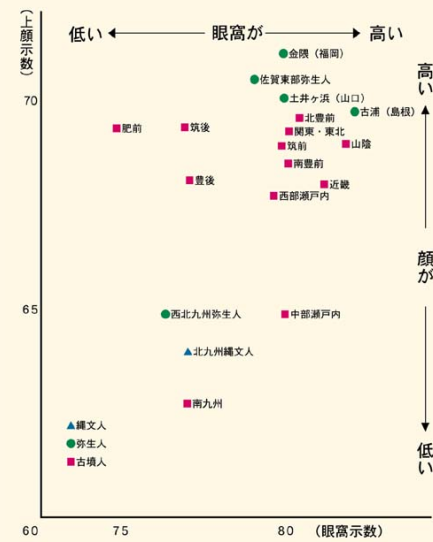
そして、さらに 定住農耕を営む渡来系弥生人の集落が世代を重ねるにしたがって人口を急速に増やし、縄文人と融合しつつ、新しい耕地を求めて、西日本に広がっていったと推察されている。

また、在来の縄文人も渡来系弥生人の農耕生活を学び、狩猟・採取から定住の道を選び、縄文系弥生集落をつくる。

そして、次第に両者が融合して現代人につながる日本人が誕生したと考えられている。

この弥生時代中期の急激な人口増加は農耕に適した耕地・水利をめぐる「戦」を生じ、個々の集落間の争いから地域間の争いそして国間の戦へと展開。戦に備えるための高地性集落や人殺傷用の大型武器を生むことになった。

弥生の「稲作・水田耕作」と「鉄」とが「戦」を知らなかった日本に「戦さ」を持ち込んだといわれる所以である。



福岡市金隈遺跡の甕棺墓群

大量の甕棺墓が時代別に印を付けて埋葬展示されている。個々では甕棺墓 348 基土坑墓 119 基人体 136 体などが発掘された

のもたらした弥生の人口爆発」 中橋孝博より)

弥生時代中期に入るとほぼ甕棺墓だけになり中期中葉にかけて急増する北九州 筑紫野市南端部隈・西小田地区の甕棺墓数の変化 中期中葉の人口爆発が読める

● 吉野ヶ里遺跡の甕棺墓

吉野ヶ里遺跡では、600m もの長さに 2 列の甕棺墓列が発掘されたほか、丘陵の各地に墓地があり、これまでの調査で 2 5 0 0 基を超える甕棺墓が見つかった。



● 筑紫野市隈・西小田地区遺跡群の甕棺墓



筑紫野市から小郡市にかけての地域には、集落や墳墓など弥生時代の遺跡が密集して分布し、筑紫野市南端部、小郡津古丘陵につながる隈・西小田地区の隈・西小田地区遺跡群は、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡群で、各調査地点で弥生時代の甕棺と呼ばれる大型の土器に、遺体を納めて埋葬した墳墓群が出土。この甕棺墓の数の年代別調査などから、弥生時代の中期中葉 渡来系弥生人の集落で人口爆発が起きていることが推察された。

● 福岡市月隈丘陵 金隈遺跡

福岡平野の東部、御笠川に沿って南北にのびる月隈丘陵の中央 標高 30m の丘陵上にある北部九州 弥生時代の特徴的な墓制である甕棺墓の共同墓地。
弥生時代の前期から後期にかけての甕棺墓 348 基、土壇墓 119 基、石棺墓 2 基、人骨 136 体が発掘された。 嘩然とする甕棺墓の数。時代別に送別された甕棺墓ごとに印を付けて展示されている。



1. 混血の進行

渡来的形質とされる顔の高さ、眼窩の高さ、梨状孔（鼻の部分の孔）の細長さを示す示数を軸にとって古墳人を見てみると、梨状孔は九州内では筑前から離れるほど横広になり、本州では北部九州と近畿・山陰を細長さの二つのピークとして中部瀬戸内が谷間のようにになっているのがわかる。

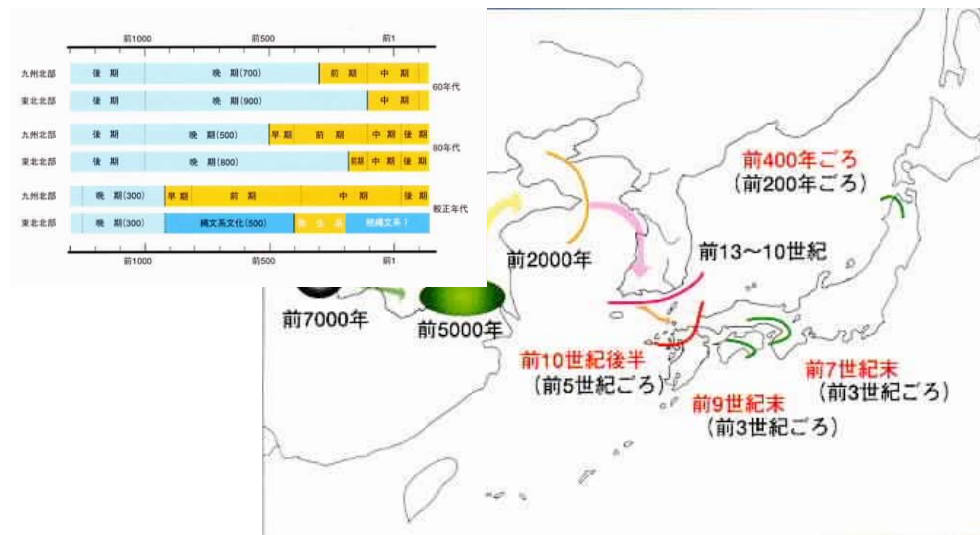
また、関東・東北も同様な値であり、近畿からの流れで理解できる。

ところが、顔の高さは、九州内では南九州を除くとそう大差はない。

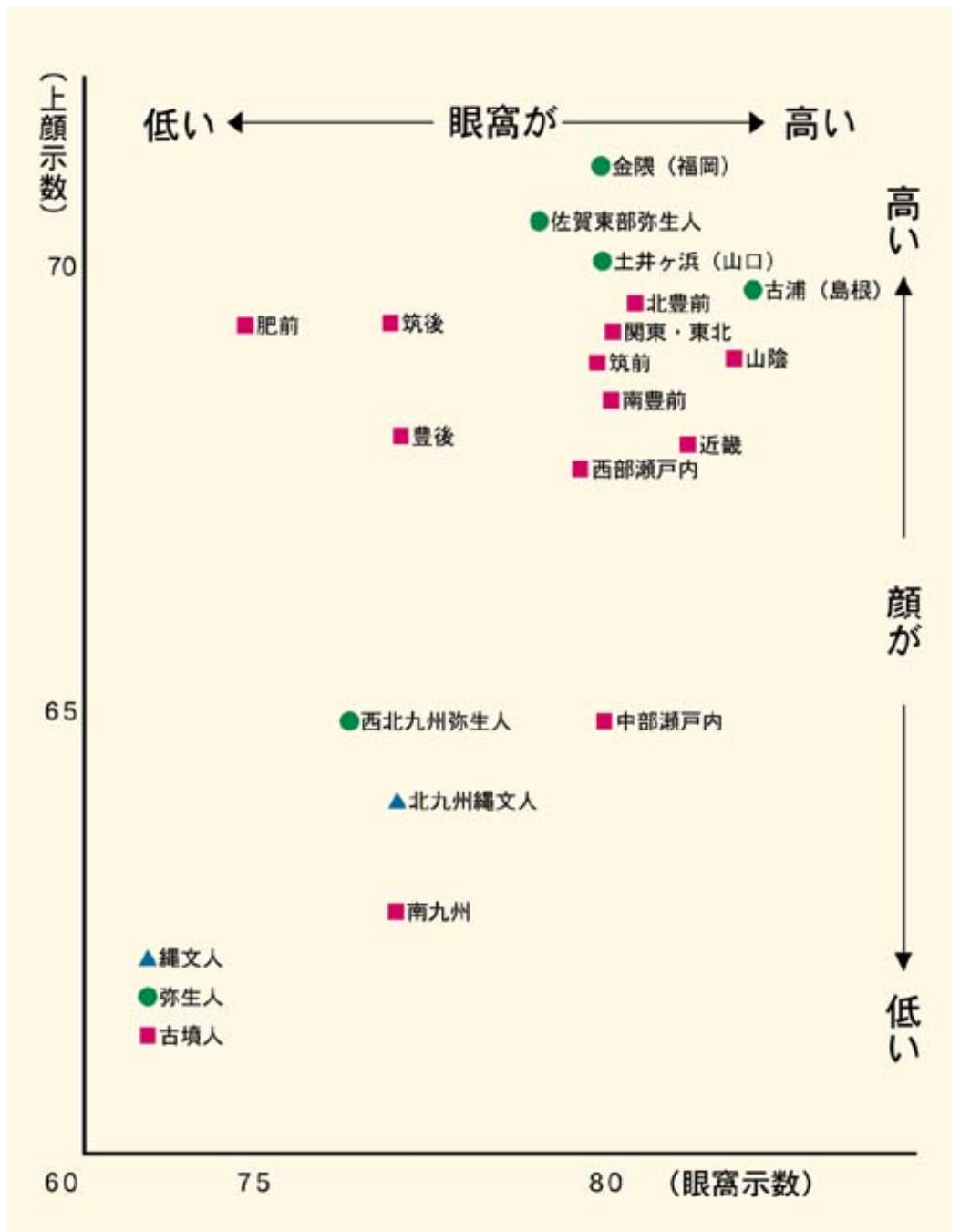
しかし、本州では梨状孔と同じく北部九州と近畿・山陰をピークとして中部瀬戸内が谷間のように低い。

逆に、眼窩の高さをみると、九州内では筑前と他の地域に差があり、本州では山陰・近畿が高い値を示すものの大差はない。

また、関東・東北の古墳人は顔の高さも眼窩も高い値を示しており、北部九州の弥生人・古墳人とほぼ同じである点は注目される。



日本列島における稲作・弥生文化の東進 歴博藤尾らによって
黒字はその新年代提案 従来の縄文晩期後半を弥生時代



最近の年代測定により弥生時代は 500 年遡ると提案
早期と呼ばれることが多くなっている。

● 弥生の遠賀川式土器と縄文土器の共存

板付遺跡などを含め、福岡県 遠賀川下流域は弥生農耕文化発祥地のひとつに挙げられています。北部九州で始まった農耕文化は東日本に伝播して行きますが、農耕文化と共に遠賀川式土器も東進し、農耕開始期の指標とされています。一方 東国の縄文土器が西日本各地で見られる。

これは、東の縄文人が積極的に西日本の渡来系弥生集落で共存し、農耕文化を習得していった証と見られている。

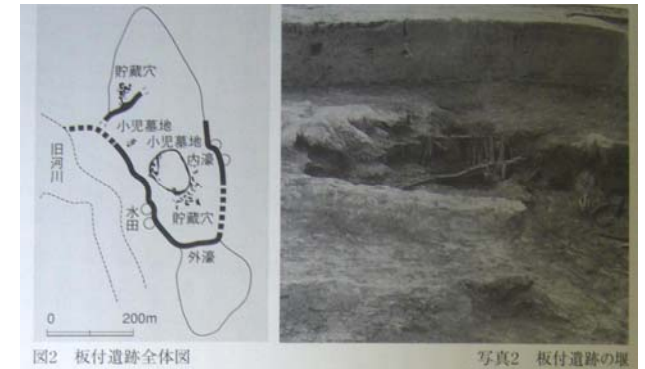
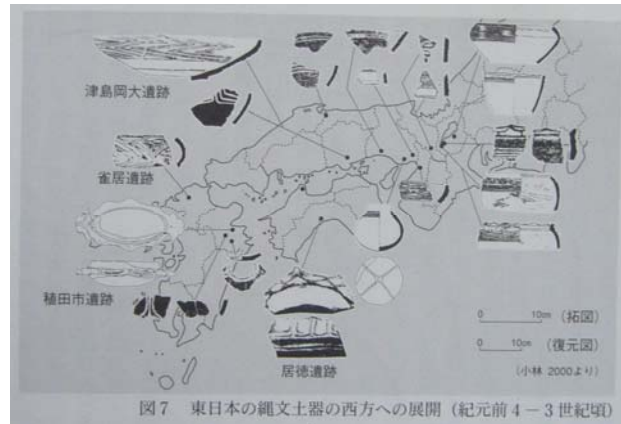
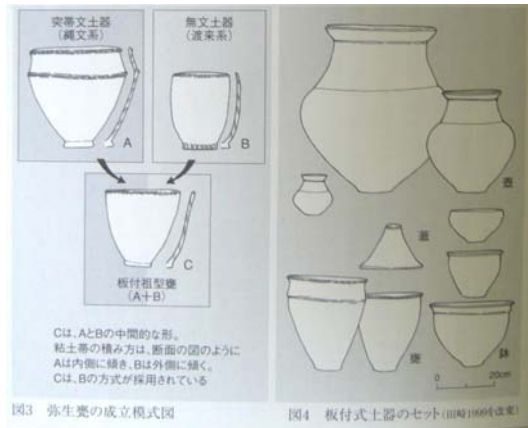


写真2 板付遺跡の堀

このような事象から縄文人と弥生人が同じ

地域の中で共存・融合しながら、水田稲作を中心とする弥生の文化が開く。

それが さらにには 新しい耕地・水利をめぐる集落間・地域間の争いをめぐって、集落内での地位格差 地域・集落間の格差を生み、争いに備える体制 環濠集落・高地性集落そして国へと発展していったと考えられている。

● 尼崎市田能遺跡 近畿の弥生時代ほぼ全期間に及ぶ大集落跡で九州北部特有の甕・壺棺墓4基出現



田能遺跡は、尼崎市の東北端、標高 7m、猪名川左岸に営まれた弥生時代（2300—1700 年前）の集落跡です。遺跡は東西約 110m、南北 120m 以上の広さがあります。弥生時代は我が国で稲作農耕が始まった時代で、田能の弥生人たちも川沿いのやや高いところに溝をめぐらし、住居を造り、低湿地で水田をつくったようです。遺跡は長期間にわたり生活の場となったため、家の柱穴、ゴミ捨て穴、貯蔵の穴、排水の溝など多数の遺構がありました。人々の生活した竪穴住居も3棟が明らかになっています。また、ここは墓地としてもつかわれ、木棺墓8基、土こう墓5基、壺・甕棺墓4基が発見されました。

遺跡の発掘は昭和 40 年の工業用水道の配水建設現場から、大量の弥生式土器が発見された事にはじまる。その後約 1 年間にわたる調査の結果、弥生時代前期から古墳時代中期にわたる大集落跡であることが確認された。この遺跡でもっとも注目される遺構は、墓と、それに伴う埋葬の状況であった。それまで近畿地方では、弥生時代の墓の発見例は少なく、その実体はほとんど不明のままであった。ここでは、木棺墓8、土こう墓5、壺棺墓3、甕棺墓1の計 17 基の墓が発見された。うち 15 基は1つのグループに、残り2基はそれらとは離れた場所に埋葬されていた。調査の結果、壺・甕を棺に利用した壺棺・甕棺墓、遺骸の埋葬可能な程度に掘り窪めた土こう墓、厚い板を組み合わせた木棺墓の3種類の埋葬方法が明らかになった。残存した人骨によって、壺・甕が子供や乳幼児の埋葬に用いられたこと、土こう墓には木の蓋が存在していたこと、木棺には高野槨か中国

産の木が使用されていたことなどが確認されている。

木棺墓に埋葬されていた男性のうち2体には、623個以上の碧玉製管玉を装着した遺体と、左腕に白銅製釧（くしろ：腕）をした遺体も発見された。上半身には朱が施されており、この2基だけが明らかに特別扱いされている。ムラの首長クラスだった事をうかがわせる。

これらの埋葬方法のうち、特に壺棺・甕棺などは当時北九州で盛んに用いられた埋葬方式である。

言い換えると この田能遺跡が弥生時代の初期から機能していたことを考えると「縄文系弥生人の集落が渡来系弥生人の農耕を学び 九州からやって来た渡来系弥生人と融合しつつ この集落を弥生の中心集落に発展させていった」田能遺跡の弥生の墓群は縄文系弥生人と渡来系弥生人融合を示すモニュメントであるかもしれない。

2. 弥生の戦 戦の備えと鏃の刺さった人骨の急増 阪神・明石の例

弥生の戦いの証拠は渡来系弥生集落を中心に人口爆発の起こる弥生中期以降 殺傷を受けた人骨のおびただしい増加 高地性弥生集落の増加 そして 大型の石鏃や石つぶてなどの出土によって裏付けられ、しばしばこの渡来系弥生の集落からは朝鮮半島や大陸に起源を持つ土器や鏃・鉄製品が出土するこの事情は畿内 私の住む阪神間・播磨でも同じである。



異相で殺られたと見られる頭骨。阪・西小田遺跡出土【筑紫野市教育委員会】



青銅製武器の刺さった人骨
弥生時代中期 / 玉津田中遺跡
①兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所提供

上半身に石鏃を射込まれた人物
弥生時代中期 / 山賀遺跡
②(財)大阪府文化財センター提供

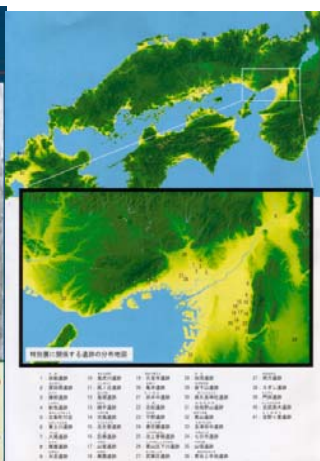
11本の石鏃が刺さった人物
弥生時代中期 / 雁屋遺跡
③四條畷市教育委員会提供



いざ 弥生の戦

2005年9月13日(水)～11月20日(木)

尼崎市立田能資料館



変わりゆく戦

大規模な戦い

大規模な戦い

近畿地方における弥生の戦い 田能遺跡企画展「弥生の戦」より

■ 大阪湾北岸の弥生の高地性集落と弥生の戦

弥生時代の高地性集落の謎

弥生時代は集落間の戦争が頻発した時代で集落の周りに溝をめぐらせ土器運搬や武器の備えをうけた人衆などが戦いを繰り返す。弥生前期末に出現する環濠集落は対峙期、古墳期の争いに備えた対峙集落であったと考えられている。また、弥生中期後半になると中部瀬戸内沿岸にかけて高地性集落が出現。弥生時代の普通集落の耕作地からみて遙かに高い場所（30～300m）に築かれた集落が出現する。この高地性集落の目的は何なのか、数々の説があるが、山の上の集落であるが、山の下の集落との交流や狩猟・漁・貝に依存される海との関わりも持っていた。洪水に対する備えであったなどの説もあるが、一般には勢力圏の違う地域間の戦い、つまり九州勢力と近畿勢力というような地域勢力間を結んだ政権争いの戦争に備えた要塞であると推測されている。会下山遺跡も同様な性格を持つ紀元前2世紀から1世紀にかけての高地性集落である。

弥生中期から後期の集落のあり方 第35回尼崎市長田産資料館特別展「弥生の戦」資料より、抜粋

1. 中期後半～	瀬戸内沿岸部の山口県東部から兵庫県西部まで島嶼・トウショや沿岸部の海に面した丘・山に営まれる高地性集落の急増期 香川県栗原遺跡・岡山県長瀬山遺跡などで 石製武器がピークで 瀬戸内海上ルートでの抗争が東から西へ移動する
2. 中期末～後期初頭	近畿地方での抗争 平野部での拠点集落が解体、大規模高地性集落が出現し、回廊文土器が見られなくなる。 この時期の大規模高地性集落として 神戸表山遺跡（神戸市西区伊川谷）がある。
3. 後期前半の短い期間	近畿地方各地で集落数・土器出土数が減少する一方 高地性集落が各地での代表集落となる この組織の代表的集落として 芦屋市会下山遺跡がある。
4. 後期中期以降	各地で分利化が進み集落数増加が見られ、地域によっては高地性集落が消滅する。 中期から後期にかけての地域間抗争が落ち着く
5. 弥生時代末	「倭国の乱」を経験して その後地域間抗争は倭国全土へ広がってゆく。



弥生中期から平安時代の複合集落
新方遺跡
石鍬のさきつた
弥生時代の人骨3体が出土
場所は明石川と伊川の合流点
早くから稲作集落が開けた地
ここでも「弥生の戦さ」があった



農耕文化の北部九州からの東進 と 渡来系弥生人と縄文系弥生人の融合

伊丹市口	酒井遺跡	縄文晩期	穀類付の土器出土、また、東日本の縄土器と弥生時代の土器が混ざりあって出土 縄文人と弥生人が交流 極めて早い時期に弥生文化を受け入れた先進集落として知られる
神戸市	大開遺跡	弥生前期	環濠集落 西日本では目新しい 東日本縄文時代の祭具「石棒」が出土 縄文人と弥生人が交流、 極めて早い時期に弥生文化を受け入れた先進集落として知られる
小田原市	中里遺跡	弥生中期	弥生式土器が縄文土器に突如混じる 大規模水田耕作集落

渡来系弥生人のもたらした定住農耕文化と「鉄」は北部九州だけでは治まりきらず、またたく間に日本列島を東進

この過程で縄文人と弥生人が融合して定住農耕生活が広がり、狩猟・採取の縄文の生活が弥生前期には西日本ではまったく消えてしまう。

しかし、この間 定住農耕の集落での弥生人と縄文人の交流度は千差万別 また 東国から移り住んで先進の農耕生活をスタートさせる集落や その逆に弥生人が縄文人の集落に飛び込み先進農耕を始める場合もあった。

縄文系弥生人・渡来系弥生人の言葉があったが、世代を重ね融合が進むにつれ、人口を増やすと共に現在の日本人に繋がる弥生人が誕生した。そして、弥生人の定住農耕生活が進み人口が増加するにつれ、集落間の格差を生み、新しい耕地・水利を求めて、地域間の争いや集落内の地位が生まれ、弥生の「戦さ」の時代へと突入する。

ちょうど 農耕定住生活が進み 人口爆発の起こる弥生中期以降であり、西から順に戦闘に備えた村 戦の痕跡が急増する。

この状況は私の住む大阪湾北岸地域でも同じであり、数多くの高地性集落が現れ、戦いに備える。

渡来の弥生人が持ち込んだ「定住農耕の文化」「鉄・金属器」によって 日本で「戦さ」が始まったといわれる所以である。

高地性集落の変遷に見る「弥生の戦い」

中期後半	瀬戸内沿岸 山口東部から兵庫西部に高地性集落が営まれ 打製武器が発達 ● 播磨灘 男鹿島大山神社遺跡 備讃瀬戸 紫雲出遺跡
中期末～後期初頭	近畿での抗争激化 拠点集落の解体と大規模高地性集落の出現 ● 伊丹台地 拠点集落 加茂遺跡の衰退と台地周辺に坂根・下加茂・小部の小集落出現 ● 神戸伊川谷丘陵地 大規模高地性集落 表山遺跡の出現
後期前半	各地で集落が減少し 高地性集落が代表的な集落になる ● 六甲山裾丘陵地 会下山遺跡
後期中	高地性集落が減少し 分村化集落が増加
後期末	「倭国の大乱」を経て 地域間の戦いから国間の戦いへ 日本全国に波及 ● 鳥取青谷上寺地遺跡 後期の集落から殺傷痕のある人骨多数出土 群を抜く鉄製品の出土 ● 妻木晩田遺跡 大型高地性集落遺跡 多数の鉄製品

大阪湾北岸の阪神・神戸西部に見る弥生の戦さの痕跡

神戸市	新方遺跡	弥生前期	17本の石鏃が刺さった人骨など石鏃の刺さった人骨3体 縄文系人骨
豊中市	勝部遺跡	弥生中期	打製石剣の刺さった人骨
神戸市	玉津田中遺跡	弥生中期	青銅武器鋒の刺さった人骨
愛媛小松町	大開遺跡	弥生中期	石鏃製作工房
豊中市	勝部遺跡	弥生中期	
芦屋市	会下山遺跡 高地性集落	弥生中期後半	石弾 石鏃 三翼鏃 鉄・銅鏃
神戸市	玉津田中遺跡	弥生中期	木棺内折れた青銅武器鋒・石鏃 樹皮巻打製石剣
神戸市	表山遺跡 高地性集落	弥生中期末～後期初頭	環濠内から鉄鏃 石弾 石鏃 小形仿製鏡
神戸市	頭高山遺跡 高地性集落	弥生中期	のろし跡 石剣・石鏃など多数の武器

弥生時代後期 山陰の鉄

	刀剣	鏃	工具	農具	伐採	他	小計	不明	総数	備考
福 岡	83	388	500	258	213	61	1503	243	1746	
徳 島	17	377	189	168	45	37	823	1068	1891	
佐 賀	26	47	91	85	69	19	337	28	365	
高 知	3	32	56	13	17	82	203	20	223	
鳥 取	26	67	224	34	76	88	515	149	934	上寺地270
岡山	13	120	105	18	17	18	291	144	435	うち94点は県北部
兵庫北部	18	50	72	0	7	15	162	7	169	
兵庫南部	11	30	22	0	6	20	89	22	111	
京都北部	49	103	53	1	1	10	217	17	234	
京都南部	1	6	9	3	2	9	30	4	34	
大 阪	3	32	19	3	14	16	87	66	153	

弥生後期の鉄器出土数
 (藤田憲司「見えざる鉄器」『究班』Ⅱ2002年9月を一部改変)



妻木晩田古墳

青谷上寺地遺跡



▲磨製石鏃・漢式三翼鏃・銅鏃

会下山遺跡出土 石弾・鏃



石剣・石鏃など武器
 頭高山遺跡出土



青銅製武器の刺さった人骨
 弥生時代中期 / 玉津田中遺跡
 ① 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所提供

上半身に石鏃を射込まれた人物
 弥生時代中期 / 山陰遺跡
 (財) 大阪府文化財センター提供

11本の石鏃が刺さった人物
 弥生時代中期 / 尾道遺跡
 四條畷市教育委員会提供



弥生時代前期人骨出土状況



人骨3の石鏃出土状況

神戸新方遺跡 石鏃の刺さった人骨

弥生後期の大型集落 鉄製品を多蔵